
龍ヶ島 A N G L E 慎

森 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍ヶ島 ANGLE 慎

【Nコード】

N6982B

【作者名】

森 翼

【あらすじ】

龍ヶ島には伝説がある。今の時代に蘇る伝説を推理し、真実を見つけて戴きたい。これはその初の話。まずは、慎の目線から事件を見届けて貰いたい。

プロローグ：教室

学校の始業のチャイムが鳴った。

そこに入って来たのは一人の少年。

背はスラリと高く、金髪のサラサラストレート。優しい雰囲気がどこことなくする少年。

彼が噂の転校生。

入って来た瞬間教室内がざわつく。

教室内ではみんなが驚いたような顔している。

一部の生徒がびっくりしたのか、

「そ…う？」

と、言っている。

そんな声を無視して、教師は言う。

「この子が、…」

1 龍ヶ島への訪れ 登場

僕は、日本の中でも南の方にあるらしい龍ヶ島という場所に引越す事になった。

両親と妹が事故によって死んだからだ。

両親の知り合いで金持ちの人がそこには住んでいるらしい。

武田さんというらしい。さらに僕と同年の中3の『真』（まこと）君という子供がいるらしい。

仲良くなれたらいいな。

そして今、武田さんに新しく家を建ててもらい、そこに住み、こんな事を考えている。本当に感謝してもしきれないくらいだ。

インターフォンが鳴り響いた。

この家の住人『麻生慎』（あそうしん）は今日から私立龍ヶ島大学附属中等学校に通う。（通称龍中）

慎は転校生として、今から龍中に向かう。

その案内をしてくれる女の子加堂聡香かどうそうかが来た合図だろう。そしてその声が叫ぶ。

「こんにちはー。今日案内する加堂聡香です。よろしくね、慎君！」

高くて綺麗な声だな。

そんな事考えてる場合じゃないや。

「ゴメン、待たせた？」

「大丈夫だよ。」

「よろしくね。えっ…と…。」

「聡香でいいよ。」

「聡香！」

「こちらこそ！えっと、慎君は真君と知り合いなんだっけ？」

「会ったのは少ししかないけど。」

「そうなんだ。あと、一つ聞いていい？」

「どうぞ。」

「神童君って知ってるかな？」

「誰、その人？」

「慎君に似てる人が前までいたんだよ。あつ、学校に着いたよ。」

そこには大きな校舎があった。それはとっても立派だった。

「じゃああそこが職員室だから。また後でね。」

「うん、また後でね。」

そして聡香は去っていった。

クラス

校内に入ると校長に遭遇した。

校長は微笑みながら、

「麻生君こんにちは。」

と、あいさつをした。

白髪の背の低いでも優しい雰囲気のおじさんだった。

僕もあいさつを返し、校長に促される通りに職員室へ向かった。

そこにはたくさんの方の教師がいた。しかし、その誰しもが僕を見て驚いているようだ。

一瞬の静寂の後、担任の村田啓吾むらたけいごと名乗る人の案内を受けて、教室へ向かった。

この学校は龍ヶ島の間人しか通ってないので、人数が少ないので、（私立にも関わらず）小学生、中学生、高校生、大学生と4つの教室に分けているらしい。

慎が教室に入るとここでもみんなが驚いたような顔をした。

「そ…う…?」

と、呟いている人もいたようだが、みんな慎に劣らぬような格好をしている。たしかに慎は、金髪で180センチと凄そうに見えるが、この学校に堅苦しい校則がないこともあり、みんなの方が凄そうだ。

「麻生慎君です。」

担任が紹介を始めた。

「今日から龍中に入って来た仲間なので、みんな仲良くしましょう。」

「と、紹介して去っていった。」

そして、休み時間になった。

僕の予想通りみんなが寄って来た。

「じゃあ自己紹介から始めるか。」

武田真が言った。以前見掛けたが、その時と大差ない。170センチぐらいの細身の体格に、明るい茶髪のトップを立たせたような髪型をしている。

「まず、俺は、知ってると思うけど武田真。真って呼んでな！」

「わかつ…」

「わたくしは真様のおつかえメイドの武田千代ただちよですう。」

僕の返事を遮るように会話に入ってきた女の子。

なんだこいつ。メイド？たしかに150センチの小柄な体に、主人(?)である真と同じ髪色のショートカットのパーマの髪型で甘い系の声してればそう見えるな。

「よろしくですうー！」

「ああ、よろしく。」

じゃあ次は、と名乗ってきたのは、赤い髪が印象に残る165センチぐらいの男だった。

「俺は田中和紀たなかかずきだ。よろしくな。」

ここから次々と名乗ってきた。

「えっと、知ってると思うけど加堂聡香です。」

「俺は葛城弘人かつらぎひろと。」

「2年の真弓拓也まゆみたくやです。よろしく願いします、先輩。」

「2年羽賀潤哉、よろしくです。」

「私は佐藤千里です。よろしく願います。」

「僕は、戸部俊とべしゅんつて言います。1年です。」

「私は1年の田辺真紀たなべまきです。」

だいたいの自己紹介が終わってきたなかで最後の一人となった。その女の子は耳まで黒、そこから一番下の肩甲骨辺りまでが金髪の不思議な髪型をしている。

背丈は145ぐらいだろうか、ホッソリしている。

「一年神童しんどう楓、よろしく願います。」

淡々とそれだけ言った。

「ああ、よろしく。」

この時、僕は楓に何かがあると思った。

散策

「楓ー！」

あの後、僕も自己紹介をした後、すぐ帰りになった。そこで、暗そうにしている少女に声をかけてみた。

「なんですか？」

あまり感情がこもっていないな。

「なんで、そんな暗いのさ、もつと明るくしようよ。」

「それはともかく、私に会った事ある？」

「ん？2歳ぐらいの時までここに住んでたらしいけど、その時會ったかもな。」

「最近では？」

「ないよ。なんでそんなの聞くの？」

「ないですか…、すみません。」

「まあ、いいけど。なんか暗そうだとさ、心配になるじゃん。」

楓はなんか訳ありだな、きつと。らしい

「…じゃあ、慎君が明るくしてくれる？」

は！？

でも僕は、言ってしまった。

「わかった、僕が楓を変えるよ。」

「…うん。でも初めて会ったのになんでそんな親切なの？」

それは、

「事故で死んだ妹に似てるから、顔がね。」

「は？」

「でももつと明るいよ。だから楓にも明るくなってほしい。」

「ふーん。」

「いきなりだけど、それが理由。でも、楓は楓だけだね。」

「そうなの。」

なんか気まずいな。

「なんかあったら相談しろよ。じゃあな。」
「そんなんで逃げ出してしまった。」

その後聡香の誘いによって、龍ヶ島を案内してもらうことにした。
聡香の家は麻生家に近いので、聡香の家に行く事になっている。
僕は家に帰った後、2軒挟んで並んでいる聡香の家に向かった。
そこでは、すでに聡香が外で待っていた。

まじまじと聡香を見てみた。

長い黒髪を垂らした160センチの女の子は笑顔いっぱい可愛いらしい。3年にもなつて、小さい子供のようだ。

「もう、慎君遅いよー。」

「ゴメンな。」

「しょうがないから許してあげる！」

「ハハハ、ありがとう。」

「じゃあ行こうね。」

そして、スーパーや、本屋、病院などを案内してもらった。
その後着いたのが、

「ここが武田君の家。」

「だそうです。」

「なんで来たの？」

「あいさつした方がいいと思ったの！」

「こつちに来て最初に挨拶はすませたけど…。」

「…そうなの？ゴメン。」

少し顔が赤い。恥ずかしいのか？

「聡香に慎一、何してんだー？」

後ろから真が話し掛けてきた。

ついでに言っと、千代もいる。

ってか、なんでこいつらは、いつもくっついてるんだ？

「龍ヶ島を巡ってたんだよ。」

「それは楽しそうですねー！。真様、わたくしたちも今度島巡りしましょうね！」

「いいよ、行こうな。」

「わーい、ありがとうございますー！」

「…」

「…」

僕と聡香はだまつてるしかなかった。

「じゃあな、二人とも。」

と、言つて次に神社へと向かった。

そこには、楓と眼鏡をかけた青年がいた。

楓はこの神社の後継ぎであり、眼鏡の青年は神社の近くに住んでいる、現在高校2年の矢沢楼やさわろうである。

家が近いから仲がいいらしい。

そんな二人を横目で見ながら、通り過ぎ、自宅へと帰ってきた。

「今日はありがとう。」

「いやいや、またね、慎君。」

「じゃあな。」

「バイバイ！」

聡香は帰っていった。

家で僕はこんな日常もいいもんだと考えた。

2 あの微笑みを 記憶（前書き）

明日への歌

作詞 T

1

明日 続く 君の 声が響いていた
今日は 君の 声が 届いていない

だけど僕たちは忘れはしないよ
君が生きていたという
真実

君を救うただそれだけで
生きている証を刻むよ

僕は僕の道を
進むよ

2 あの微笑みを 記憶

翌日、学校へ向かおうとすると、聡香が家の前にいた。

「迎えに来たよ。」

「ああ、ありがとう。」

というわけで、聡香と一緒に学校へ向かう。

他愛のない話をしてるとあっというまに着いた。

そして一番に和紀に話し掛けられた。

「楓と何かあったか？」

「いや、べつに。」

「楓があんな嬉しそうに話してたのは久しぶりだったから気になっただけだから、あんま気につけないでな。」

「おう。」

… 一体何なんだ。

そんなのはすぐに忘れて授業に集中。そして放課後、この学校は男女どちらもできるスポーツということで、バスケット部しかないの、それに入部した。

そして、今日は部活はないので、すぐに帰ることにした。

家に帰って思い出す。

「欲しい物があつたら、遠慮せず言えよ。」

って、真に言われたから今度何か貰おう。

そんな事を考えているうちに寝てしまった。

翌日、僕は聡香に気になった事を聞いた。

「神童って誰？」

「楓ちゃんの事？」

「違う、僕に似てるらしい人の事だよ。」

「そんなの聞いてどうしたいの？」

「いいだろ、べつに。」

「人には忘れたい記憶が誰しもあるの。だからそれは、龍ヶ島の住民に聞いてはいけないよ。」

と言い、僕を残して駆け足で学校へと、聡香は行ってしまった。

その時、慎は仲間外れのような感覚を覚えた。

学校でほかの人に神童について聞いても教えてもらえない。まさか、重大な秘密でもあるのか？

僕は、その変な不安を明るさで消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6982b/>

龍ヶ島 ANGLE 慎

2010年10月28日07時16分発行